石櫻新聞

発行所
盛岡市長田町
岩手高等学校
岩手中学校
出版委員会
責任者　志和　昇
印刷所　山口活版

社史 年史 単行本 機関紙 社内報 ハウスオーガン カタログ パンフレット チラシ ダイレクトメール ポスター 新聞 各種チケット

山口活版

盛岡市内丸17の46（23）1225

昭和43年度　石桜会　前後期役員

	執行委員会 会長	執行委員会 副会長	執行委員会 書記	執行委員会 執行委員	常任委員会 生活	常任委員会 学習	常任委員会 出版	常任委員会 図書	常任委員会 文化	常任委員会 体育
前期	藤沢正男	久慈永真・山田公一	小山田義行・長沢美明	長沢正俊・栃内秀士・近藤健一・中居正和	沢口良喜	斎藤福次郎	近藤健一	中居正和	長沢正俊	栃内秀士
後期	山田公一	小山田義行・桑原伸行	楢山義彦・吉田豊	沢口良喜・斎藤福次郎・小原和雄・川村洋右	横沢忠夫	中野広一	阿部和茂	佐藤秀利	桑原伸行	平賀満夫

校風樹立のために

三E　黒沢重人

　高校生活も三年にもなると、学校の実情もわかり不満、苦情も出てきます。学校の現状を高三の一生徒が痛感したこととして、下級生の諸君に伝えるということは、たぶん何も知らずにいる多くの下級生に何等かの益になると思います。

　さて、校風は一体どのようなものだと考えているでしょうか。私は、これを生徒に対して少くとも何等かの好ましい影響を、在校生すべてに与え得るものと最低限に定義づけてみました。そこで、われわれ岩高の校風はということになりますが、残念ながらそのような最低限のものでさえも、ないように感じられてなりません。

　われわれが入学して最初に耳にする言葉は〝石桜精神〟という言葉ですが、これはおそらく、不屈の敢闘精神、つまり強靱な気力だと思います。しかるに、現在の岩高を覆っているのは無気力即ちあきらめのムードなのだと感じられます。だから、あえて現在岩高には校風は存在しない、〝石桜精神〟は空言にすぎないというのです。

　私は新入生との対面式になると、少なからず赤面するのを覚えないわけにはいきませんでした。それは、新入生に向かって「はやく校風になれて下さい」という言葉が在校生のあいさつとしていわれるからなのですが、この言葉が問題なのです。校風を学校の持つ一種独得なムードと解するなら、むしろ、校風に慣れることなく破壊して下さいといった方がずっと妥当であると思います。何よりも今は、事実を認識することが大事ですから。それから、校長先生は新入生に学校の沿革などを話されますが、そのときは彼等にこういってやっていただきたいと思います。それは「石桜精神は現在は失なわれてない。だから、私といっしょに回復の努力をしてくれ。」と付け加えてほしいということです。なぜなら現状打破のためにはつまらぬかくしだてをしてはいけないからです。現在という時点を、目前にさらけだし、一つ一つ認識してゆくことが大切なのです。先生も生徒も各々一人一人が、自己を深く反省する必要があるのです。そしてこの倦怠した空気を一掃してしまわなければなりません。

　そこでもう一つの避けられない事実、我高は普通高校だということについて、気力の問題を考えたいと思います。この原因として、大きく二つ考えます。一つは「あまえ」です。みなさんの家庭環境がどのようなものかはわかりませんが、飛び切り経済困難だという人はまずないでしょう。そこに「あまえ」の生ずる余地があります。また「先生についていればなんとかしてくれるだろう。」といったような先生に対する甘えではないかと思います。もう一つは前にもいったように無気力だということです。この二つが学力不振につながっている、そう思えます現在われわれのいる学校は普通高校なのだということを、今こそ自覚し、反省しなければなりません。この二つの大きな原因が、毎年毎年悪循環をくりかえしているのです。前に校長先生に望んだことも、これを防ぐ一つの方法ではないかと思ったからです。現在校風になれるとは、新たな気持ちで入学してきた新入生の気持ちを、在校生がこわしてしまうことにすぎません。これは在校生の大きな責任問題です。また先生方にはこのムードにあきらめを感じ、なげいてばかりいるように見受けられることがあります。それではいけません。「おまえたち気力がないぞ、もっと深く自分というものを見つめろ」とはっきりあやまりを指摘し、そればかりでなく、ついてこないなら縄をかけても引っぱってやるといったような気迫を持ってほしいのです。いま何より必要なのは、その気迫なのです。しかるに先生方までがどこかこの無気力を避けているように思えてなりません。生徒が無気力をノンビリと解し、先生がよそ見してたらいったいどうなるでしょう。解答は明日です。あげくのはてに、生徒がバラ〳〵に受験するために受験指導を一体にしぼれないなどといわなければならなくなるしまつです。三年の半ばすぎてからこういうことを言われたなら、大きなショックでしょう。何故、もっと早く、二年一年のうちからしっかりした受験指導をとらなかったのか、と問いたい気持ちです。そこにはもはや気力の存在する余地はなく、あきらめがあるのみです。悲しいことに、われわれは真の受験の厳しさなど知らないのです。そして、その厳しさを教えてくれるのは同じ厳しさを通ってきた先生方だけであることも。だからわれわれはもっと自覚する必要があるのです。

　今開かれている文化祭にしろ、その運営は七、八割がた先生によってなされていることでしょう。これでは自我に目覚めるころにある高校生にとって、不満以外の何物でもありません。我高の生徒はこの不満のはけ口さえ持ってないのです前にいった「あまえ」も案外こんなことが原因となっているかもしれません。先生方にはこのことを、よく考えてみていただきたく思います。「おまえたちに何ができるか。」ではなくて、「できなくてもいいからやれ。」というふうでなくてはいけないのでしょう。要は、生徒の積極性を生みだすきっかけをつくってほしいということです。東京のある高校では、全学連まがいの校長室占拠を行なったそうですが、彼等の是非はともかく、自分達でやろうとするその気力は、認めるところがあります。われわれは無気力さを石桜精神という言葉でもって、飾りたててはなりません。飾りにすぎない精神は虚しさ以外の何物でもありません。われわれは先生も先徒も等しく一丸となって現実をみつめ、それに厳しく対処しなくてはいけない時期に立っているのです。入学してくる新入生に「はやく校風になれなさい。」と堂々といえるような校風を築かなくてはなりません。

　先日、校長先生は亡くなった詩人で、先輩でもある「村上昭夫」という人のことを話されました。村上先輩は「石桜精神で頑張っている。岩高のために頑張る。」といったそうです。まったく頭が下ります。これを聞いて、以前は石桜精神があったのだ、石桜精神は空論ではなかったと始めて感じました。同時に、石桜精神なんてあるはずがないという自分がなんと虚しいものであるか気づきました。この石桜精神はわれわれにとって、いわば失なわれた故郷なのです。故郷は元来地味なものでしょうが、失なった者にはどんなにみじめなことか想像つくでしょう。我々は今、この故郷を失なっているのです。そして回復するためには唯一つ勇気ある行動のみなのです。精神とは実践でなければいけません。我々は先生も生徒も一丸となって行動しなければなりません。これが石桜精神だと肌で感じるためにはただ勇気ある行動のみなのです。このことを高二、高一の諸君はよく考えてみて下さい。

今後の生徒会について

二D　山田公一
二E　桑原伸行

　はっきり言って、生徒会を盛り上げて行く自信はほとんど無いに等しい。ただやれる問題は、できるかぎり取り上げて行くつもりでいる。それを生かすも殺すも諸君石桜会会員の協力次第である。

　実際、毎年〳〵のことであるが、予算総会ではあれ程までに、どこの部、委員会でも、沢山取ろうと必死になるのに、それ以後は、各部の放課後の活動を除くと、どの委員会も活動をしているかどうかさえ、わからない状態になってしまう。ましてや文化部等においては、だらだらと文化祭まで来てしまい、数ヵ月あるいは、数日間で間に合わせてしまうようなことになっている。こんなことでどうして、文化祭などと言えようか。

　おそらく誰一人として生徒会というものが自分自身の学校生活の中に入ってきていると感ずる者はいないだろう。我々もまた然り。しかし、とにかくどんな事でも良いから、執行部なり各代議員、委員に自分たちの要求をぶっつけてみてはどうか。それでもなお且つ動こうとしない代表などは罷免してもかまわないから先ずやってみることだ。自分の殻の中にとじこもらないことだ。独断や主観を捨てて、客観的に生徒を見てほしい。

　また、遺憾ながら、過去においてあまり石桜会というものが真の意義というものを表わさなかったせいもあるが、（もっとも、過去といっても、さらにさかのぼれば、現在以上にすばらしい働きをしていただろう）これからは、会員が、もっと、「自分は石桜会の構成員なのだ。」ということを自覚する必要がある。そして会員の本当の意見というものを反影させていこうではないか。

　生徒会は「生徒手帳」の中に、昔と変わらぬまま、存在しているだけである。多少なりとも「生徒会」らしいものに高めて行かなければならない。

　どうか、諸君!!執行部の活動を出来る限り、ささえてもらいたい。

有題無題

三年某組　喜　患　坊

　某先生から「この原稿を読んで何か批評文を書いてくれないか」と言って何か知ら部厚い原稿を渡された石桜精神云々の座談会集であった。僕も小林と言う生徒のように楽をすることが好きな性格なので、実は読まないに等しいほど楽な気持ちで読んだのであった。ところが、生まれて始めて僕は楽をしてその結果に腹を立てるような経験をさせてもらったのである。授業で、時間には物理的時間と心理的時間があるのだと言うことを教わったのを覚えている。この原稿を読むのに、どれほどの時間を要したか、今はもう正確には覚えていないが、読み進むに従って、早くこの原稿から脱出したい解放されたいと言う気持ちが増していったのは事実である。どんな立派な小説であろうと、それが長編であれば、思想に関係なく生理的に欠伸の頻出に悩まされるという周知の事実がある。短編と言うものにさえほど遠いこの原稿を読んで、欠伸など出る筈もなかった。が、しかし、この時ほど〝何もしないでいたいと言う自由〟を犯されたと思ったことはなかった。実に厭々としていたのである。もし心有るならば読者諸君、この厭々を延々の掛詞として用いたことを知って欲しい。これが時間の心理的時間なのである。楽をしたことと厭々とは自己の内面的態度としていかにも矛盾することであるが、これは自己分析を自省にするまでもなく、原稿よすべてお前が悪いのだと言う厚かましい僕の態度を否定出来ないほど原稿自身のせいだったのである。楽をさせてもらえるほど内容が乏しく、厭々となるほど内容が乏しかったのであり、その意味において両者の基盤は同一だったのである。さて少しばかり内容に触れてみようとするのであるが、この際変に客観的ぶっている連中に真剣に客観的批評を加えることほど馬鹿〳〵しいことはないと思うのである。この「ぶる」と言う言葉であるが、いままでに一度だって誉め言葉に使用されたためしはない。今の場合もこの意味に便乗させてもらおうとするのである。この座談会、出席者（司会者を含めて）の御歴々には石桜精神＝伝統と言うものが何者であるか御存知ない。縦んば知っていたとしてもそこを避けて通ることしか出来ないほど意志のない人間に成りきっているのである。出席者の御歴々が口を揃えて言うには、もはや石桜精神＝伝統は一部の運動部にしか残っていない、むしろそこに醜く姿を歪めて残存しているのだと。ところで君たちは知っているか精神＝伝統と言うものが、いまだかつて生きているのか死んでいるのか分らないような弱い部分には追随したことがなく生命力、活動力に富んだ強い部分にはいつまでも追随して存続していることを。そして君たちは考えたことがあるか。石桜精神＝伝統を君たち自身の言う醜い姿に追いやったのは君たち自身であることを。そして更にその醜い姿とは他ならぬ君たち自身の姿なのだと言うことを。そこで僕は、一部の運動部にでも石桜精神＝伝統と言うものが何らかの形で残存していることに奇妙な安心感を覚えるのだ。それは石桜精神＝伝統と言うものが残っていてくれたと言うことではなく、まだ活動・努力・苦闘しているものがたとえ一部の運動部であっても生き残っていたと言うことに対してである。さきほど「そこを避けて通ることしか出来ない」と言ったが「そこ」とは、実はこの活動・努力・苦闘のことだったのである。ところが出席者の御歴々、そのことは認識しているのである。だから立派だと、僕は言おうとしているのではない、むしろその逆である。人間の本性が活動的だなどと思っているから、ただ認識すれば良いと言うことになるのである。甘い、実に甘い、悲痛さがない、覚悟がない。古来哲学者の言葉を待つまでもなく、「出来ることなら何もしないでいたい」と言うのが、人間の本性なのである。これこそ人間が克服すべきものだ。そして僕がさきに「ぶる」という言葉を使用したのは、こうした認識の間違いを指して言うのである。そのような意味でこの座談会に出席しているような人物には石桜精神＝伝統と言うものを批判する資格はないと断言する。石桜精神＝伝統を真に理解したいと思うなら、現在の衰退が何時頃から始ったのだろうかと言うような馬鹿げた疑問を発するのではなく、誰でもいい、毎日コツコツと一歩〳〵努力して行く、そのような過程を経た人にこそ石桜精神＝伝統を語り、批判する資格が与えられるのではないか。

座談会　"石桜精神"　その現状分析

現在、我が岩手高校の現状は如何と問われた場合、果して何を以て誇りとして答え得るか。嘗って先輩たちが築き上げた数々の栄光の上にノウノウと黙して坐って良い時期で、今はない校風を文化に準えるならば、文化が文武両面の均衡した発展を望まれるのと同様にしてある可きだと思う。そこで三年生数名に、我高の文化活動について話し合ってもらった。

大森　集った皆さんが高校三年生、あと半年足らずで卒業して行くが、こうやって見ると皆上の学校へ進学して行くようだが、授業を見ているとのんびりしている。何を言っても反応がないし、まあ勉強しているだろうと思うが、大学入試についてどう思っているか聞いてみたい。

小林　先ず勉強はしたくない。なるべくやってもらくにやって、それで自分の希望する大学に入りたいという気持ちが強い。

川村　やっぱり僕もそう思うが、将来に対して不安が相当ある。

近藤　今聞いていると、授業に対してのんびりしているといっているが、僕は今は自分に対する学問をつかみたいので時間が欲しい。

大森　黙って聞いていると楽をして、良い点を取って自分の希望する大学に入りたい、まあ一口に言って虫の良い話しだと思うが、結局そこに落着くんだけど、素直に言えば、それじゃ希望する大学に入れないと思う。で、授業を実際やってみて、目つきがしょぼんとしているし、教科書は見ているが、何を考えているのかはっきりしない。それほど大学受験に対して切迫感を感じていないのではないか。たとえばもっと他に、今近藤君が時間が欲しいといっているが、勉強する時間ではなくて青春を掛かた時間が欲しいのではないか。そういう時間が欲しいというのは分かるけれども、たとえば時間ははっきりいってあるんだ、勉強していないとすればさ。で、そういう時間を持った時に何をする、何もすることがないんでない。その点どうだい。

近藤　今時間が欲しいといったのは、遊びたいというのじゃなく、何かひとつに打ち込みたい、要するに数学だったら数学、物理だったら物理、とにかく自分のものをつかみたいということ。要するに試験の点を取るだけじゃなく、自分が一生を通して深めて行くための足がかりが欲しいということ。今は打ち込むものがないんじゃないか。で、それを索してみたい気がする。

川村　僕の友だちにも近藤君みたく、受験までに、ふう良くやったなと思うほどやってみたいという奴がいるが、僕の場合はそういう気持ちが全然出てこないというのは僕自身どこに原因があるのか全然分からない。大学のことばっかり夜なんか良く考えるんだが、そうかといって勉強して夜遅くまで起きているわけではなく、ただなんとなく夜遅くまで起きて、大学に入りたいなあと考えているだけだ。

小林　洋右のいったことはその通りだが、原因は分からないといったが、原因を考えると、人のせいにするわけではないが、校風とか、それから生徒だけが切迫感がないのではなく教師だって切迫感がないのではないか。勿論人のせいにするわけではないが、自分の責任でもあるが、学校全体、個人と学校全体の責任だと思う、もし責任があるとすれば……

近藤　今洋右がいったように、僕の場合夜遅くまで勉強するというのではなく、そんなものは問題ではなく、だから家に帰ればナイター聞いて寝るだけだけれども、一番感じることだが、今の受験は技術、テクニックだけを覚えれば良いという風に思える。そんなもんじゃなく、参考書などに向った場合、理解出来ない所が出てくる、そいいう場合自分に腹が立つ。自分にはこの才能がないんじゃないかなあと考えて、夜遅くまで勉強することが出来ない。自分の確固としたものを早く見付けたいと思うのが現状だ。

上打内　勉強したいときにはすごくしたくて、学校の授業でもやっていて本当に受験に役立つのかなと考えて、一種の不安を覚えて、集中出来ない授業も中にはあるし、環境に左右されやすいせいか、いつのまにかぼやっとしていることになっている。

大森　内の生徒を見ていて、大人しいという感じがする。それが無気力につながるのかどうか分らないが。僕の高校時代をいえば悪いけれども面白くない授業はとにかくさぼった。さぼって自分のことばかりやっていた、といっては悪いけれども、たとえば自分の教えている科目だから気が引けるが、漢文の先生がすごく面白くなかった。で、その漢文の時間が午後からあるわけだが、さぼって映画に行ったね。帰っても何もすることがないから。それから今は政経といっているが、昔はとはいってもそんなに昔じゃないが、社会科社会といったが、それも面白くなくて、それも出たのが数えるほどしかなく、点数がギリギリついてきたんだけども、そのように嫌いなものは徹底してさぼった。けれども好きな科目には情熱を燃やした。たとえば、日本史、化学そういうものはすごく好きだった。特に化学などはクラスでは人に負けなかった。勉強そのもの、科目そのものが好きなんじゃなく、先生に影響を受けたという点が多分にあったね。要するにその先生に人間性の魅力があるとなれば徹底してやったね。その面も多分にある。まあそういってしまえば世の中は渡って行けないけれども、あいつは嫌いな奴だからということを信用しないということではいけないが、要するに人間関係には人間性が影響するのかな。科目だとかに。でも高校生ともなればそうもいっていられないのではないか。

近藤　確かに教える先生によってその科目が好きになるといったことが僕自身あったからね。中学校の頃から担任が化学の先生だということで高校まで化学に関してはスムーズに入って来れた。その反面物理などというにがての科目が出て来ると、反撥というか、自分にそれがこなせない所が出て来たりする。こなしてみたいと思ったこともあったが、それほど勉強はしなかった。また内の学校の生徒が大人しいというのは、僕はこの学校に六年間居るけれども、生徒を大人しくさせているのは校則自体じゃないかと思う。たとえば土足の問題にしろ、他の学校、一高などでは靴は自由だし、そういう面は自由にしても良いのではないかと思う。どういう問題にしても校則、伝統で押し切ってしまって、生徒自体の活動を押えているのはむしろ学校側のように思う。

大森　生徒会の話しだけれども、この間の総会、正直いってぎょっとせざるを得なかった。全然会議という場ではない。あたりでがやがや騒いでいる。それから執行部にしろ誰が議長なのか分からない、ただしゃべっている、決を取る時にも棄権をどうするのか決めていない、そうして決の取り直しをやる。要するに会議の仕方が下手だと感じた。特に生徒総会だから印象が深かった。生徒が大人しい、校則がうるさいということであるが、僕の高校では文化祭というものがあって（運動会を止めて合わせただけ規模は大きい）ものすごく活発な奴がいた。たとえば石原慎太郎を文化祭に呼びということになった。そうすると慎太郎というのは当時太陽族で、まあ、赤いズボンはいて、サングラスかけて、要するに当時は、常識人といわれる人から見れば評判が悪かったわけだ。で、慎太郎じゃ呼ばないと学校側で決めたんだな、それで生徒会でグレて慎太郎を呼ばないんなら裕次郎を呼ぼうじゃないかということになって校長に談判したわけだ。そういういきさつがあってまあなんとかまとめられて結局文学者の伊藤整を呼ぶことになった。それから僕が二年生の時かな丁度あの時は安保闘争があって高三の生徒で学校さぼって安保闘争に出ていった生徒がいたが、帰って来て校長に怒られたけれども、まず校内的にも校外的にもそういう風に活発だったわけだ。高校生がそういうことをするのは悪いといわれているけれども、まあそういう情熱があったということだな。

小林　はっきりいってそれは、ここは能力別に分けられているわけだ。してはっきり岩高は三流校になっている。いつか某先生が言ったけれども、勉強が出来ない奴はスポーツも駄目だ。うちの学校では能力別の分け方にも問題がある。他の学校では先生のいったことが行なわれていると思う。うちの学校では何処か落ちて来た奴が来ているからそういう気力がない。そういうところにも原因があるのではないか。悲しい話しだけれども……

近藤　たとえば岩中から岩高の一年になった時、他から新しい生徒が来るというので胸が高鳴った。要するに今までにないものが出て来るのではないか、他の人々の何かをつかみたいという気持ちが強かった。で、そういう人達は岩高のムードにのまれてしまったのではないか。そして活動出来なかったのではないか。そういうことに失望した。

川村　僕も他の高校を落ちて来たが、それでもこの学校の不活発を感じた。でもやろうと思ったことがなかった分けではないけれども、やっぱり校風にのまれたのではないか。最初に入った時から生徒会をやろうなんて考える奴はいないと思う。でも最近、山田君が頑張っているが反撥を受けている。そういう新しいことをやろうとするものの障害になっているのではないか。僕自身も障害の一人になっているのではないか。

大森　今聞いていると、石桜精神というのは根強くてね、もっと活発な面を出していると思うんだ、過去のものだかどうかわからないけれども、今聞いていると、この学校の校風は何もしないで無気力なものと聞えるが、それじゃこの学校の石桜精神と今の校風とはアンバランスではないか。

川村　勿論アンバランスだと思っている。よく応援歌練習で石桜精神などといわれると吹き出してしまう。要するに入った時の校風は以前からあるように思われ、石桜精神とはこのようなものと思ってしまうのではないか。

川村　その通りだ。入ってきた時からそうだったんだから……

近藤　そういう面に対して、僕は、学校の方ばかり批難するが、学校自体が最初の創立者の意向をくんでいれば、生徒の活動の落度もある程度認めてくれれば、学校側の何事も起こしたくないという気持ちも分かるけれども、多少でも僕達の気持ちをくんでくれれば学校生活も楽しくなるんじゃないか。

川村　そういう学校の気持ちは確かに良いと思う。今の学校というのは、その気持ちをくまないで、ただ校則とか、最初に短髪だから、今も短髪でなければと、そういうことに固執してしまって、この問題では最初のうちは受け入れられるような気配でうまく行きそうだったが、だんだん学校のペースに巻き込まれて駄目になってしまった。もう少し生徒の意向を聞いて欲しい。

上打内　話しはずれるが、岩高は一つに孤立したような感じがする。岩高の中だけで、勉強とか社会のことを見ている。他の学校のことがほとんど分からない。僕は他の中学から来たから、他の高校に友人がいて、よく話しをするが、考え方とか勉強ではっきりいえば劣等感を持ち、そこかしてしまう。

近藤　はっきりいって岩高のイメージ、他の学校に与えるイメージは知らない。

川村　確かに岩中から来ている生徒は全く他のことを知らない。中学の頃は学校同志の交際があった。岩中でもないとはいえないが限定されている。交際がつづく下手だと思う。僕も岩高に入ってから、中学校の時にはもっと活発だったが、尻込みするようになった。恥ずかしいということを考えるようになった。

上打内　本当のことをいえば、岩高がどこにあるか位しか知らなかったし、またたま〳〵遇うと変な恰好して歩いていたり、そんなイメージが強かったから、そこから皆がそんなイメージで見ているんじゃないかと思うようになって、活動が出来なくなって来た。

大森　そうするとたとえば二、三年前、勉強の面では岩本重広君が常時日報テスト等で上位を占め、あるいは卓球、柔道、水泳等でも優勝したりしていたが、そういう活動を見て岩高生としての誇りを持たないか。

小林　感じるな僕は。だいたい僕は入る前から人の話しを聞いて、三高よりに岩高と思っていた。だから洋右みたいなことはない。愛着はある。運動で岩高の名前を上げてくれるとうれしい、誇りに思う。

近藤　さっき岩本さんの話しが出たけれども、確かに僕が小学を卒業して中学へ入った場合、私学というある程度公立と違う点に、一応、オックスフォード・ケンブリッジみないなイメージを持っていた。勉強方法でも確かに岩高では岩本さんみたいな人が出ているかも知れない。だけど私学の特質として教師に教えられるよりも、図書館とかそういうものを利用して自分なりの学問を身に付ける、要するに岩高には不活発で自分から道を切り開いて行くということがないのではないか。僕の持っていたイメージでは試験〳〵で追われなくて（自分のやりたい科目をつかんでやれると思った。勿論やれる人はやれるだろうけれども、僕の意志が弱かったからも知れないが、そういう消極的にさせる何かがこの学校にあるのではないか。

大森　そうするとそういう雰囲気は誰が作っている、学校側かい、それとも生徒自身か、それとも両方が慣れ合いになっているのか。そうしてそういう状態というのは直らないものか。

川村　現在だったら直ると思う。それも今の三年生は無気力の代表のようなものだから、一応今の一年生とか二年生とかを教育出来る立場にあると思う。それの立場を作ることが出来れば出来ると思う。今の一年生はまだこの学校のことをはっきり分からないと思う。それで一応僕達が無気力でなくするそういう雰囲気を作って三年生が教育することだと思う。このままでは今の生徒は受験に失敗するだろう、僕も一年生の時は大学なんか気楽に入れるものと思っていたし、クラブのことばっかり考えて学校全体を見ようともしなかったし、自分も無気力と言うものを作っているものの一員としてこうして育って来たように思う。それをなくするためには、一年生の時から他の中学校にいた時の雰囲気を出させてこの学校を盛り立たせることは出来ると思う。

近藤　確かに生徒の面から見れば生徒のあるべき態度はそれが良いのかも知れないが、だけどこのようなことを考えるのは毎年三年生になってからだから、別の面ではこの学校では生徒が先生方に遠慮し過ぎるのではないか。その遠慮が生徒を不活発にさせているのではないか。遠慮をさせないことが生徒自身が自由に活動できるひとつの要素ではないか。

大森　遠慮とはもっと具体的にどういうこと。

近藤　詳しくは説明出来ないが何かあらゆる面で形式ばっているように思うから。

川村　僕も中学の時、先生がおっかないとか、遠慮するなどということは少しもなかったと思う。高校に入ったら先生がすごくおっかなく何にも出来なくなってきたような感じがする。

小林　僕もそういうところがある。やっぱり中学の頃なんか、先生と組み合ってお前なんか最低の生徒だ出て行けなんていわれたけれども、勿論その先生はなぐる先生だったけれども、恐ろしくもなかったし、反抗しても高校の内申書に悪く書かれるんじゃないかなどと心配しなかったものだが、今は違う、先生方が隠険に見える。

上打内　あのね、良い例ではないけれども、他の学校では早弁をしていても何にもいわないそうだし、今はほとんどいわないようだけれども、二年生の時なんか良くいわれた。一高の友達に聞けば、早弁している所を見つかっても先生が早く食ってしまえなどと、融通性があるのかどうか知らないけれども、僕達は変な所に固くなっていて、何かとじ込められているような気がする。

近藤　確かにそういえるかも知れない。たとえば小林君の意見を発展させると、先生方自体公私混同して、そういうものが生徒を不活発にさせているのではないか。たとえば平常点がひかれる、授業時間うるさいとそういうことが平常点のマイナスに繋がるとか。

上打内　少しぐらいはめをはずしても勉強をしっかりやっていれば良いのではないか。しっかりやっているかどうかは分からないけれども。

大森　たとえば去年の二Eか、あそこのクラスに行った時ね、すごく勉強の雰囲気が楽しかったね。回りが少しぐらいがやがやしていても、よく自分の意見をいってくれた。とにかく楽しかったね。ところが、今年はうんともすんともいわない。勉強に関しては遠慮しないでもらいたい。どんな下らない質問でも良いからまあそのためには生徒自身勉強して来なければ駄目なんでね。この間、詩の勉強をやっていたんだな、ⅢBだったか、四つ目ぐらいまでは何も出て来ないんだね。だからこっちから一方的に話していたんだけれども、五つ目だったか一人の生徒が反撥してくれたんだな、そうしたら次から次へと出て来た。すごく面白い授業になった。

上打内　本当はああいう風に話し合うのが本当の授業だと思う。

近藤　僕はね、教科書だけでは本当の勉強じゃないと思う。こういうことをいったら悪いんだが、要するに、参考書なりを調べて、自分なりに問題点を見付けて、それを解決し、確固としたものをつかまえて、それは公立よりも私立の方が出来たと思うのだが、その特質を利用出来なかったのが残念だ。

川村　元の二Eは確かに良いクラスだったと思う。クラスが分かれるとき寂しい気がしたですね。今度のクラス（三E）は静かなだけで、生徒自身で発言を押える威圧感を感じる。

近藤　僕は対照的に大人しかったⅡDだったわけだ。僕は余りにも生徒自身が互いに遠慮して、自分が発言したら笑われるんじゃないかなどと思ってね。今のⅢEはⅡDよりは活発であると思う。先生も知っている通り、元のⅡDはひどいもんだ、授業中一言も出ない。それが一年間通してそういう状態だったわけだ。もっと発言のある授業が学校全体に必要なんじゃないかと思う。僕は卒業生の言うことを良く聞くが、要するに先生方は余り信用出来ないという。だから信用しない方が良いという。これはどういう現象かな。

小林　そうかなり信頼感に欠けているのは事実だ。

上打内　むしろ虎の巻の方が良いとかなんとか……

川村　先輩達は皆そういうことをいう。

小林　いや僕たちも今、色んな先生方に会って感じることだけど、批判は許されないかも知れないが、実際に何となく信頼出来ないのは事実だから、どうも確実性がないし……

大森　たとえばそういう信頼感というのはどういうところから感ずるか。

近藤　僕は年間を通して、真面目に勉強している生徒、自分で本当にそれに突っ込もうとしている生徒、ある程度信頼感、人格性にもよるだろうが、なければ授業に没頭することが出来ないのではないか。だから自分一人で参考書を開いている。分からない所があれば何ヶ月もそこを行ったり来たりして、その上質問する生徒が少ないので、そういう生徒は自然と自滅して行く。

大森　そりゃ大学の教師じゃないから何から何まで答えるというわけにはいかないかも知れない。でも僕の先生としてのモットーとしてはこう思っている。どんな質問でもいいからしてもらいたい。その質問はその場その場の思い付きじゃなくて、ある程度勉強してきて、してもらいたい。それに対して自分は十質問されて十答えれないかも知れない、だけれども僕はこう答えると思う。調べて来て精一杯答えるっていうね。たとえば生徒と一緒に調べたりして……

近藤　そういう姿勢は大変立派だと思う。だけど、一番ここに大切なのは生徒に気安く答えられ、気安く一緒に考えられるという場があまりにも少ないのではないか。

大森　僕も最近、あまり質問がないのでがっかりしているのだけれども、やっぱりあれかね、お互いに慣れ合いになってしまっているのかな。

一同　そうだろうな……

近藤　要するに、生徒自身がそれぞれの殻にとどこもってしまうという現象が年々深くなって来ているのではないか。僕は新しく入って来た先生に、今までの授業の先生ではもの足りないから、どんな授業をやってくれるかという期待になる。要するにこの殻を突き破って自分の中に新しいものを与えてくれるのではないかというような。諦めのムードから早く抜け出したいために、早く卒業したいと考えるし、卒業して社会に出たら何か出来るのではないかというような気にもなる。また、その反面、自分の学力に対する不安から卒業することが惜しいような気も、なんとなく割り切れない気持ち……

小林　僕も何か早く卒業したいような気持ち……

上打内・川村　なんか社会に出ると出来そうな気がするな。

川村　僕は学園生活に対してすごく憧れていた。中学校の頃は、外国文学を多く読んでいたから、その中によく出て来る学園生活から憧れを持っていた。だから岩高なんかも割といいんではないかな、なんて考えてところがここは学園生活なんていわれない。新しい先生に希望を持っていると話していたが、たとえば一年生の時に入って来た及川洸先生だけど、英語の時間に歌を歌わせるなんていうことは一寸ないと思うんだ。あんなことを望んでいますね。僕あんまり批判することは好きじゃないんだ。自分に自信がないから……

近藤　僕もそう思う。

上打内　でもやっぱり前よりは深刻に受験のことを考えて来ているのだし、そこからそれに関係する授業のことも考えるしそうすれば先生に繋って来るから批判的にならざるを得ない。

大森　さっきから聞いていると、学校の雰囲気っていうな。そしてその雰囲気だがだれているというね。ところが学校を構成しているのは、先生もいるし、生従もいる。それではだれているのは誰だい。

佐々木　先生達？（笑）

近藤　それは歴史を遡ってみなければ分からないのではないか。要するに年々それが深まって来ている以上始まりかけたその元を調べてみなければ……

大森　うんそうかな。元を調べてみなければ分からないかな。

近藤　それはいくらいったって玉子が先か、鶏が先かと同じだと思う。結局一方は一方を、一方は一方を主張するだけに思ってしまうのではないか。

小林　ただささ……いえることはさ、僕たちは三年間で卒業してしまうし、先生達は何十年もいるということだ。見れいるわけだ、生徒を。

川村　でも、あんまり古いことを考えると駄目だと思う。先生方が考えるのは古いことでしょ。自分たちがここにいた時の石桜精神を考えて、僕たちを見てなんだかんだいうわけだ。

近藤　要するに時代に即さないわけだ。

大森　だからね、伝統というけれども、石桜精神、まあその他の精神で良いけれども、生きるか死ぬかというのはその担い手なんだょうな。だから今の伝統を生かすのは今の生徒だわけだ。つまり伝統に生命を吹き込むのは学校の中にいる今の生徒だわけだ。卒業した人は勿論駄目だ。そうでなければ伝統というのは蘇らないのではないか。

近藤　でまた、その反面、生徒に対する伝統の正しい伝達が出来ていないのではないか。そういう反発も当然出てくるのではないか。

川村　学校構成するのは、先生であり、生徒会であって欲しいんだょな。僕としては。生徒もだけどね。生徒一人一人では何も出来ないのだから、生徒会というものが学校を型づくるのがいいんでないかとも思う。

近藤　またさ、こうもいえるんじゃないか。たとえばさ、こういうムードに飽きたらずして、自分が引っ張って行こうとするけれども、引っ張って行く適当な指導者が見付からない。生徒会に本当に信頼出来て、政治力があって、そういう生徒が本当に出て来た時、盛り上がるのではないか。はっきりいってそういう生徒は埋もれているかも知れない。また……

佐々木　もれていると見るべきだな。（一同うなづく）

川村　いたとしても、なかなかこれは出せないと思うぞ。この学校を運営するためには根本から変革しなくちゃ。それだけやるんだったらね。

大森　それで自主性ということばは一番すばらしいものであると同時にまた危険なものなんだよな。自主性ということばはね。どうだい。その生徒一人一人の自主性っていうのは、あるかい。

近藤　僕は本当にやる気のある奴は学校を切り離した場合あると思う。学校と切り離した場合だよ、あくまでも……

大森　その切り離すっていうのは……

小林　要するに自分だけでね、自分は自分で行くという奴はいる。しかし学校を良くしようという奴はいない。けれども、自分が頑張って大学へ行こうなんていう奴ね。そういうような自主性、なんというかな、個人主義……（笑）

大森　悪くいえばエゴイズムか……

一同　エゴイズムじゃないと思うんだ。

近藤　要するに自分だけはよくなろうというような。

川村　いや僕たちが何かしようとすると、それに対していやな目で以てみるような自主性を持った奴がいるんだよ。つまり勉強に対してですよそれは、僕が勉強に対して自主性を持っていないからいうんだけれどもね。ぐちじゃないけれども（笑）

上打内　エゴイズムじゃないんだょ。他の奴はどうでもいいんだょ。うん、個人主義さ……。

大森　同じだ!!

一同　いや違う。ぜんぜん違う。

川村　ことばの問題だ。ニュアンスの問題で考えてみるといいじゃないか。

佐々木　お互いにな、協力しあって発展していく。

大森　皆はいま個人主義といっているけれどもさ、それ発展するかな。

一同　発展するな。

佐々木　僕達の四人では発展したったな。校外に出て。（笑）まずああいうことが発展の一つだね。あれが僕の自主性だと思うんだ。校内では出ないんだ。

川村　ああいうことは出ないもねえ。

上打内　ああいうことはもっとやられていいと思うんだ。

大森　ああいうこととってどういうことだ。僕は分からないけれども。

一同　ねえ!!（笑）

大森　一や本当に。

佐々木　放送活動!!

大森　ああ!!

川村　ああいう風にね。校外に出て岩手高校を示す。スポーツじゃなくてね。文化面で。他校との交流ではないけれども一般に対して

上打内　一般の、社会との接触になるんじゃないかな。

佐々木　あいつは学校に頼まれたんじゃなくて、僕達四人が出かけて行って、僕たちが協力し合って、その間に先生にも協力してもらって。

近藤　そういう反面ね。とにかく自分だけで本当に自主的にやっている奴はいるわけだよ。確かに、学校の成績はともかく。とにかく一生懸命やっている奴はいるんだよ。演劇の浅沼君にしろ、彼は立派だと思うんだよ。僕は彼は彼なりに自分の生き方を見つけたことに対して立派だと思う。そして自分にそういうものがないことに腹が立つ。

大森　そうすると生徒の自主性というか、良い面が結構出ているんだな。

川村　いや少ないです。

近藤　少ない、数が少ない

佐々木　勉強じゃ出てないけどもね。

近藤　数が少ない。

川村　他校に示すのは演劇だけだから、まず、運動じゃなくて、他校と交流の持てるものではね。それを広げていけばいいと思うんだよな。接触がないんだよな。

大森　その接触に、別に先生達が止めているわけじゃないだろう。

川村　あれ？

近藤　僕はそうは思わない。なんというかな……

上打内　つまりみんなが朝学校へ来てね、授業が終われば直に帰るわけだ。往復運動に過ぎないわけだ。一言でいえば流す。町をぶらっと歩く程度、話しをするっていうことがないわけだ。たまに好きな奴が集って、話しをするけどね。本当に校外とは接触がないわけだから考え方も限定されるし……

出席者	
三B	上打内　茂紀
三B	小林　俊朗
三B	佐々木　憲一
三E	川村　洋右
三E	近藤　健一
司会	大森　英征

大森　つまり自分自身を発展させるっていうのは、色んな人と接触することなんだよな。

近藤　うん、僕もそうだと思う。

川村　学校の中だけでは駄目だと思うんだ。

近藤　要するに、新しいものが吸収出来ないんだよな。

川村　面白いよな、他校に行って話しをすれば。

大森　うんそれは勉強を離れた面ね。勉強というのはもっとさっきいった個人主義ね、勉強というのは友人なんかいらないのではないか。あれは教科書との対話ではないか。

川村　僕は中学校のときはそうじゃなかったな。僕はいつも人にくっついている方だったから、それでうんと出来る奴がいてね、話しが面白い奴でね、そいつにくっついて勉強したおかげで、成績が上ったね。僕みたいな人間にはそういう風なのがいいんだよね。

大森　そうすると、あれか、勉強でも、そりゃ一人でじっと考える時間がいるが、で、後ある程度それが過ぎるとやはり出来る奴と話し合いながら自分の知識を深めて行きたい、そういう傾向かな、勉強の面でも。

近藤　僕は違うな。僕は自分でやりたい。要するに、僕は親父の仕事の関係であちこち歩いて来たから、他の学校では意地が悪くて、信用出来ない奴がいるわけだよ。ということがある程度自分の身に付いているために、独力でやることになり、授業と協同しない面が多分に出て来ているんだな。だから授業に熱心でないということになりかねない。顔は出しているけれども、中身で何をやっているか分からないというような

大森　たとえばね、僕はよくやったものだけれども、分からない所を仲間に聞いたりするかな。

小林　聞くな!!

川村　聞かないな!!

近藤　だってさ今の僕達の間では、自分の分からない所を気安く聞ける雰囲気なんてないもね。

川村　僕達の学級はそうらしいな。

小林　僕達は、別に分からなければ聞いて、分かれば教えて……

大森　今年のⅢBは去年の二Eみたいな傾向だもんね

川村　ほとんど二Eが入ってるもな。

大森　でも今年のⅢEは去年の二Dよりは活発だぞ。

近藤　ひどすぎた。

小林　いったもの、黒沢がいったし、畠山いったし、やっぱりE組の出身だよ。

近藤　生徒自体先生に対して遠慮が多いように思えるんだよ。

川村　僕はさ、三Eを元の二Eのようにしたかったので、そういうことをしたんだよね。僕が最初だと思うそれまではね、三Eは誰もしゃべらないで、好きな勉強をしていたんだよ。僕が後で遊んだりしていると、皆遊ぶようになってね。そしたら僕のことを邪魔な奴だなんていったりね。

近藤　僕はそうは思わない。非常に面白い。

小林　それに関しては僕達はいいよな、遠慮もないし

上打内　勉強に関して、聞きずらい奴はいるかも知れないが、そんな奴はほとんどいないんじゃないか。

小林　僕達、特別出来る奴がいないからじゃないか。同じような頭だから。

近藤　どんぐりの背比べ。

大森　でね、また僕の高校時代の話しで悪いけれど、馬鹿みたいに勉強するのもいたし、全然しないのもいた。でもするのもしないのも不思議に調和してたと思う。話しする時にしたしね。こんな奴もいたな、数学の時間に教科書を立てて弁当食っていたり、それから勉強では先生方に期待しなかったね。期待しないといえばおかしいが、とにかく自分でやらなくちゃと思ったね。勉強だけは……

上打内　そうなるのが本当なんだけど。

近藤　学校自体が能力別に分けるからさ、クラスとして一つにまとまらない。ディスカッションやっても駄目。残念だな。協調がない。六年間もこんな状態だろ、あきらめちゃってなんとも思わない。

川村　僕、クラス会したいのは、元の二Eだね。今の三Eぢゃやる気がしない。

小林　そりゃ僕達だって話し合いになればよ、僕たちのクラスだって意見出ないぞ。何かないかといえば全然ない。

近藤　やれるのは少数グループか。

大森　そういう面は僕達の頃もそうだな。

小林　どこもそうだ。

近藤　要するにさ、学校生活として一番不満なのは、生徒自体、協調性がないということ。

大森　協調性というのはさ、消極的になれば、惰性になっちゃうしね、一番いいのはそれぞれの自主性を持った上での協調性かな。

近藤　そう思う。一人の者について行く、そんなもんじゃ面白くない。

大森　結局、自主性が一番重んぜられているけれどもその自主性、一体どうしたもんかな。出てこなければね。

佐々木　生徒会活動!!

近藤　そういうのは小さくまとまってしまう。自主性のある奴は……

小林　そういう自主性というのはどこから生まれるんだ。だってさ、それが分からなければ、ほら、家庭環境から生まれるとか。そうだとすれば僕達は駄目だしさ（笑）、もしも生徒会が活発であれば生まれるとかさ。

川村　その自主性というのは学校をみた場合なの、個人をみた場合なの。

上打内　皆がさ、考えて、やって面白いものには、自然に出て来る。

川村　自主性があるかというと……

上打内　あるんだ皆。だが、それは、自分のやりたくないものには全然出て来ないしさ。

川村　それでいいのさ（笑）。やりたくないのが出なくて、やりたいのが出れば、結局少数グループが出来ても、なんていうかな、そういうのは愛校心があってさ、それであると機会さえあれば、行動は出来ると思うんだよ。

大森　自主性はやっぱり何かの方向性がなきゃばらばらになっちゃうんじゃないか。

佐々木　うん確かに。

近藤　だから少数グループにまとまっちゃう。

大森　それじゃ石桜精神の方向性というのはどうかい。

川村　そうじゃない、生徒会だよやっぱり。

佐々木　その生徒会運営を押えているのは学校でしょ。

川村　それをやらないのも生徒達。

佐々木　いや運営に支障を来たしているのが学校、シ

ステムからいって。やった経験上ね。

小林　でも僕が考えるに生徒会が良くなっても自主性が出るとはね、いや比較的出るかも知れないよ。今よりは。でも、それ程大きな力にはならないのではないか。

佐々木　過激に出れば、生徒の方で何か感ずるんじゃないか。

川村　そうそう大きく見なければ見失うんだよな。

近藤　要するに一人一人の生徒の自覚が足りないんじゃないか。

川村　一応この学校に慣れてしまっている生徒にはそれは取り外せないんだよな。

小林　それはあると思うんだ。今年の一年生では岩中から来たのは四十人位か、来年になればもっと少なくなるから出て来ると思うんだがな。岩中から来たのは三年間何も知らないで来ているから、生徒会のことだぞ、高校がやってくれるからね、僕達は違ったわけだ。生徒会で苦労して来たから、だから良くなるんじゃないかという気がするんだけどね。

川村　生徒会で一番重要なのは日々の活動だよな。

近藤　それも成績どうこうのではなくてね。あまりにも成績を気にしすぎるから片寄ってしまうのではないか。

小林　だから結局大切なのは生徒会となるのか。

大森　あのね、こういうこと感ずるか。成績〳〵ってあまりにもうるさいというような。

一同　あまり感じないね。

小林　うん全然うるさいとは思わない。だって先生だちさえのんびりしているように感ずるもの（笑）

近藤　自分の将来を決めるのに関係するのは学校の先生だよな。人生観を持たせるなんていうのはね。

川村　そういうことは全然ない。まずHRがないね。対話がない。

大森　対話がないか。

近藤　全然ない。だじゃれはあってもね。

上打内　HRGあるでしょ、今の学級はどこも同じだと思うけれども、"HRの泉"だったか、あれを書いた通りにやって……

川村　あんなの必要じゃないんだよ。

上打内　一応は話しをやるんだけども、そういうこともあるかも知れないが、もっと生徒とが一緒になって話し合うことがあるような気がする。

小林　そうだな。

近藤　はっきり、ああいうものは必要じゃない。

小林　話し合えばさ、自由に話し合えば、話し合う校風っていうものがだんだん生まれて来るのではないか。HRの時間に話し合うことの面白さというものを知れば、だんだん話し合うようになって来て、それがだんだんと盛り上がりの方向に……

近藤　一度にそれをやるんじゃなくて、やるとなっても大変だから、小さなディスカッショングループを沢山作ってやっていく。

小林　だってさ、作るったってさ、僕達が話し合っても話し合うのはいつまでも僕達でさ、だから最初はやっぱり強制させなきゃ駄目だと思うんだ。

佐々木　そう過激なことは、一度は必要だと思う。

大森　対話ね、そうすると一番必要なのは先生と生徒との対話か。

佐々木　いや大切なのは生徒同志!!

川村　それを指導するのが、影でですよ、先生。

佐々木　表に出ちゃこまる

小林　僕は今の一年生にはそれをさせるべきだと思う

大森　要するにあれか、結論をこっちで決めておいて、討論させて、その結論に持っていくなどとするのは駄目なのか。

一同　駄目だ。

大森　要するに経験の中から各自が方向性という、そういうものを見つける。

佐々木　広がって行く……

近藤　こういう結論が出るだろうと予定を立てるのではなく、八方破れにやって行く。

小林　今の話し合いのようなね。

川村　そういうことから自主性は生まれるような気がするな。

小林　僕も今、こうやって話していたら生まれそうな気がして来たんだよ。

川村　ただ一年生を三年生が引張って行くのかな。それとも一年生同志でやっていく、どっちが良いかな。

近藤　一年生同志は集まり易いかも知れない。しかし僕そこが分からないんだな僕は年代を越えた集まりが必要だと思うんだけど。

川村　それは今不可能なんじゃないか。

大森　生徒同志の対話に対して何か邪魔しているものがあるかな。

川村　まず下級生にとっては上級生が邪魔だ。僕はおっかなかった。文化部の奴はまだいい、運動部だよ。

小林　だってそんなの関係ないじゃ、普通の話し合いだったら。

川村　そうともいえないんだぜ、学校全体を動かすことだからクラブにも関係してくる。

小林　違うよ、そんなんじゃなく、生徒会を動かすということでなく、だだクラスでさ、自由な話し合いをさせるっていうことさ。

川村　問題は行動においてなんだよな。

小林　いや行動はだんだんよ、その話し合った一年生が上になれば下を引張って行くんじゃないか。

近藤　確かにそうかも知れないね。ぼくは去年二年生の時、他の学校の文化祭を見に行って、デスカッションに参加したが、そこで自分なりに発言した。終ったら自分に満足が出てくるんだよな。要するに種をまくんだな。そういう種をあちこちにまく、集まるかどうかは疑問だけど。

小林　僕はさ、そういうことが問題になるから最初は強制的に話し合いをさせるべきだ、つまりHRの時間でもよいから。

近藤　そうなっても発言するやつと、しないやつとがいる!!

小林　うんだからよ、誰か議長になって当てればよい。誰だって思っていることがあるんだから、いいたくてもいえないやつがいるんだから。

近藤　そういうやつを見付けるのがむずかしい。

小林　見付けるって、時間さえあればなんとかなる。話し合いたいやつだけではね。だから最初はやっぱり強制的に。今の一年生に期待するのは話し合いの場をうんと設けること。学校だって良くなると思うね。勉強時間も七時間授業をふやしたりしているのだから。

近藤　授業時間がふえたからって、必ずしも良くなるとは限らない。

小林　違うさ!!勉強の面でもそういう努力をしているうえ、それに合わせて話し合いの時間もうんと設けて!!

大森　あのクラスに代議員っていうのがあるよな。あれ総会に出て行った場合にクラスの意見を持っているのか。

近藤　ないね!!

大森　たとえばさ、クラスで練って練って出て来た意見を代議員が持っていくというような。

川村　そういうようなのはない。代議員は何やっているかわからない。

大森　そういう時間はないのか。

一同　ないですね!!

小林　HRの時間にさ、講堂に集めて、校長先生の長い話しを聞いているよりもあの時間を話し合いの場に使わしたらね。

川村　非常に無駄だ!!

大森　講堂に集めて校長先生の話しを聞くっていうことがか。

近藤　生徒の反発をかうだけだね。

川村　ああいうのがね。生徒会から今日は何をやるからというようなのが出るならいいんだがね。

小林　だからね、話し合いをさせた結果ね、たまに講堂に集めてする校長先生の話なら本当に価値が出てくると思うんだ。聞く体制が出来てないんだよな。

大森　さっき小林がいったけれども付属の校風に似ているということね。

小林　ああ似てます。やっぱりね、付属中学のなんというか、ぼっちゃん育ちというか、気の弱い所がね。それが岩高に入って最初に感じたことでしたね。それが今になって考えて見るとスポーツの面でも似ているんですね。負けるスポーツ見ればとくに似ているんですね。（笑）

大森　どういう点。

小林　なんか逆転してやるという気力がないですね。逆転されたらもう一つ逆転してやるというような。

大森　がめつさね。

小林　がめつさ!!

大森　そういうがめつさがないということが、全ての面に表われているんだな。生活の面にもね。

佐々木　勉強にも表われている。

近藤　思うにね。どの生徒を見てもね。素質はあるように思えるんだよね。それがのびないというのはあまりにもがめつさがなさすぎると思うんだね。

小林　この間も遠藤（教頭）先生が話していたけれどもね。一年間浪人したら日報テストが五十点も延びた。岩大の工学部に入ったそうだけども、延びる力は十分にあると思うんだ。

大森　うん、あるんだな、ないとは思えない。

佐々木　どんよくじゃないんだね。

小林　落ちて見なけりゃ分からない（笑）

大森　どうだろうな、そういうものを引き出すということだけども。

川村　僕自身ね、一浪すれば同年代のやつと精神年齢は同じになると思うね。

近藤　僕もそう思う。要するに現実の厳しさを知らないんだような、はっきりいって。

大森　ところで現実の厳しさを知るには。

川村　僕達は一浪するより仕方がない。多分それによって開眼すると思う。

大森　開眼するのはいいけれどもね。出来ればその開眼を在学中にもっていきたいわけだよね。

上打内　話し合う、どんどん。

小林　それでもむずかしいで!!、僕こうやって話し合ったからって家へ帰って勉強するかったらね。いつもそうなんだな、僕って駄目なやつだと思うばかり。話すんだらいくらでも話すんだけどもね。

近藤　家に帰ってナイター聞いて寝る。

川村　それが行動出来ないからであってね、行動に移せばね。

大森　うん、それを行動に移したいね。

一同　そうですね。

大森　何かが欠けている？そういう場がないことか？

川村　今、話しが出ても行動に移せないのは、最初の話し合いが大切だと思うんだけども。

近藤　それも、フェアーな話し合いね。要するに"やじり"みたいなのが、とくに運動部に多いけれども、そんなんじゃなく真剣な話し合いをね。

大森　運動部なんかは？

近藤　はっさり言って今までディスカッションなんかやっても、ある程度"ひやかし"で出て来るのが多い。

川村　ひやかしだけだったらまだいい、それをこわしに来ている奴もいる。

小林　つまりほら、クラブで肉体的に苦しんでいるわけだから肉体的に苦しんでいるのが男の意地だとか、そういうふうなのがあるんじゃないか、だからそれが文化部や、比較的楽だと思われている運動部なんかを軽べつする。

近藤　そうじゃないと思う。文化部だって精神的に苦しんでいるんだ。

小林　実際に運動部はロードなんかして苦んでいる。それは分かるけれどもそれだけしか頭がまわらない。おそらくおれだって苦しい運動部に入っていれば、楽な部にけちつけていると思うな。

近藤　だけどさ、文化部で本当にやろうとしている者にはやはり苦しさがあるんだ。

小林　でもそれは分からないだろう。だって文化部で精神的に苦しんでいるぞといったって肉体的な苦しさが分らないのと同じじゃないか。

大森　だったらまるで他人を軽べつするために運動部に入って来たみたいだね。

小林　ただささ、運動部は自分達の苦しさ他人に表現したいわけじゃないだろうが、じゃましに入るんだな。

佐々木　権力というものを示したいんじゃないか。

小林　うん、伝統的にあるな、だからね、ああいうふうに総会なんかじゃまするわけだ。個人的にはすごくいい奴なんだが、勿論人のことなぐるやつだけどね。個人的に話しすると人がよくってどこも悪くない、だから……

佐々木　クラブの存在だな、昔から……

川村　クラブの代表だと考えるんだよ、彼等。

小林　一人一人話しすると気がやさしというか本当にいい奴だ。

大森　人がいい。だからあれじゃない？なんというか石桜精神というものか？まあそのような漠然としたものはないけども運動部に、かえってそんな伝統があるんじゃないかね。悪いか知らないけれども。

近藤　僕は本当の石桜精神はないと思う。

小林　でも本当かうそかは本当のことを知らないからじゃないかな。それでも運動部にはそういうようなものがあるね。

大森　そうすると石桜精神イコール運動部の精神。

近藤　違うな

小林　いやそういうふうになっているね、今は。

近藤　本質的には全然別個だ。

小林　本質的ではないけども、今の石桜精神は運動で使われているな。

近藤　僕も中学の頃、運動部に入っていたけれども、苦しいことは苦しい。

大森　しかし、その苦しさというものは自分の精進のためのものであって、なにもそれを売り物にして他人をやっつけるものじゃないだろう。

小林　そうそう、そこなんだよ。

佐々木　それを間違って考えている奴がいるわけだ。

近藤　先輩、後輩の間柄ね。今思うとただ使われているような気がするね。そういうものに対する反発がかなりあった。

佐々木　だから岩高は団体競技に弱いんだよ、個人精神だけは盛り上っているけどね。

大森　野球なんかも確かに個人だけども、やはりチームワークが第一だよね。うちの生徒を見ているとエラーしてもニコッと笑っていたり、三振してもニタリとして帰ってくるね。

佐々木　テレかくしかね。

小林　厳しさが必要なんだと思うよ、まず岩高は高学年になればほとんどレギュラーになれるからね、そういう面でも厳しさがなくなってくるんじゃないか。

上打内　やはり練習なんかも集中的にやる。

大森　長時間かけても、だらだらやったのではなんにもならない。そういう習慣が勉強の面でも影響する。ぼやっとして時間をすごしても、中味はさっぱり。

近藤　要するに形だけ整っている。

小林　でもそればかりとはいえない。ホッケーなんかは短い時間にすごい練習をして、身の細る思い。とにかくすごい集中練習をしているね。

佐々木　岩高は技術はいいんだよね。いい先輩なんかが来て教えていくからね、ところがだめなんだな、精神がボケッとくる。

小林　運動は勉強に通じない。

大森　そうかな。

小林　つまり運動が強くがんばれば、勉強も良くなるとかさ、態度も良くなるとかね、それは絶対通じないと思う。

佐々木　絶対とは思わない。

上打内・川村　僕はあると思う。

近藤　スポーツと学問の苦しさは本質的に違うと思う

小林　スポーツではどんな苦しさにも耐えれる。中学の時やって来たからいえる。ノックなんかは耐えたもんね。ところが三時間も四時間も机に向って勉強するとなると、とても〳〵。ただ関係があるとすれば、そのクラブのふんいきがまじめでさ、たとえばそのクラブの中に生徒会役員なんかいて、仕事もするし勉強もすると、随分影響を受けて、おれもっていう気になるね。だけどただ、運動だけの苦しみは勉強に通じない。

佐々木　負けてはならないという精神は通じるんじゃないか。

小林　しかし俺たちだってすごく負けたくない根性はあった。一年前の負けたことが思い出され、ちくしょう負けたくないという根性は付属の中でも俺たちはまれに見る程あった。ところが勉強の面ではね、どうもつながらない。中学の先生が運動をやれば勉強も出来るようになるといったが、そのことばは最後まで信用出来なかった。

川村　でも関係がないわけじゃないと思う。もちろん百%じゃないだろうけども小林君の場合出来なかったのは、小林君自身の性格にもよるんじゃないか。

小林　んでも、俺たちは話し合ったんだよな、そいつらはほとんど一高にいったけどね、通じないということには意見が一致した。

大森　皆、話しが尽きないようだけれども、残念ながら時間が来てしまったようだ。今後このような機会が沢山欲しいと思うと同時に、批判だけじゃなく、批判を内面に含みつつ、外に行為化したいものだと思う。今日は本当にごくろうさまでした。

先輩寄贈図書

歌集「カルトーシカ」

盛岡第四高校校長　目時　隆太郎

盛岡第四高校校長である著者が敗戦から二年間のシベリアでのとらわれの日々を追憶し、まとめた短歌集「シベリア虜囚日記」と副題されている。

昭和十九年十月応召し、ソ満国境の最前戦に送られた著者は、終戦を迎え、戦友らとともにシベリアへ送られた。三十歳を出たばかり、まさにこれからが自分の人生という時だった。次々と倒れてゆく戦友をみとりながら、あくまでも人間らしさを失わず、また異民族に接して自他の長短を心静かに反省し、一民族としての体質改善をはからねばならないと考えた著者の、その後の生き方を方向づけた重量感のある二年間がそこに展開されたわけである。

「この歌集は、あくまで当時の私の目や心に映ったものが私だけによみがえってくる平凡な日記の断片にすぎないもので、いわば私だけのささやかな一つの記念碑である」と著者はいうが、そこにこめられた戦友たちへの慰霊の心や、今はなき両親への感謝の気持ちは、痛切であるとともに一種のすがすがしさを感じさせる。

二十二年五月、著者は待ちに待った帰還船で舞鶴に帰ってきた。そしてそれから、すでに二十一年余がすぎた。著者にとってその二十一年は、シベリア抑留生活からの延長線の上に立っていることが、本書によって感得される。それにしても、記録の持ち帰りの許されない抑留生活から、よくこれだけの歌稿を持ち帰ったものと驚かされる。三百五十首の作品は、そのときどきの著者の感慨をよく伝えていて、感動的である。

題名のカルトーシアはロシア語でジャガイモのことという。（岩手日報より）